

函館仮博物場の成立と展開

著者	金山 喜昭
出版者	法政大学資格課程
雑誌名	法政大学資格課程年報
巻	8
ページ	23-35
発行年	2019-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022250

函館仮博物場の成立と展開

法政大学キャリアデザイン学部教授 金山喜昭

はじめに

函館公園の入り口から市立函館博物館に向かって緩い上り坂を歩いていくと、白亜の洋館が見えてくる。1879年（明治12）5月25日に開場した函館仮博物場である。下から仰ぎ見るように建てられているその建物は、北海道有形文化財（1963年7月指定）として、今でも当時の姿がそのまま保存されている（写真1）。

日本の草創期の地方博物館を代表する函館仮博物場とは、どのような博物館であったのか。これまでに岡田一彦^{註1}や関秀志ら^{註2}等の先行研究があるが、本稿はその成り立ちと運営状況などを再検討することにより、その特徴を明らかにすることを目的にする。

ホーレス・ケプロンの提言

この函館仮博物場は、どのような経緯からできたのであろうか。まずはその前史についてみてゆくことにしたい。

明治政府はロシアに対する危機感から、北海道の防衛と開拓が近代国家の建設に欠かせないと認識し、北海道開拓は政府の重要政策の一つとなった。1869年（明治2）8月、そのための行政機関として開拓使を設置した。黒田清隆は1871年（明治4）、開拓使次官のまま開拓使の最高責任者となり、1874年（明治7）に開拓長官に就任した。黒田は北海道開拓に着手するにあたり、有能な政策顧問を探すために渡米したところ、アメリカ政府の要職を務めたホーレス・ケプロン（Horace Capron）が招聘に応じてくれることになり、1871年（明治4）に来日した。ケプロンは御雇教師頭取兼開拓使顧問として、学校、炭坑開発、道路建設、鉄道、工業、水産業、農業などの分野について建設的な提言を黒田に対して行った。その中で、ケプロンは博物館の設立についても進言している。

ケプロンは、来日早々、農学校を設立することを提言している。学校は、1872年（明治5）、東京芝増上寺境内の開拓使東京出張所構内に開拓使仮学校として開校した。仮学校は、北海道開拓に必要な有能な人材を養成する官立学校^{註3}であった。

実は博物館についても同じ時期に、開拓使に対して建言書を提出している。そこには「教導ノ道ヲ開クニ^{ライブラリー ミセーラム}ハ文房及ヒ博物院ハ歟クヘカラザル事ハ當然ナリ」^{註4}というように、図書館とともに博物館の設立について言及している。関秀志らの調査研究によれば、このケプロンの提言について、博物館史上の意義を次のように述べている。

ケプロンは「教導ノ道ヲ開ク」方法、即ち教育施設として「文房」（図書館）と共に「博物院」（博物館）をあげ、博物館資料収集の方法については日本産の鉱物、植物、動物を採集し、外国産のそれらと交換することを具体的に提案しているが、館設立の意義や館の種類については具体的にはふれられていない。おそらく博物館の意義については、農務局長として業務上からも欧米の博物館に関する知識をもっていた彼にとっては自明の事と考えてふれなかったものと思われる。また、館の種類については、収集、交換を提唱している資料の種類から推測すると、「傳統的に自然物の断片や遺物を陳列して、地質学及び生物学方面の資料のみを取り扱ってゐた」当時のアメリカの一般的な科学博物館（Science museum）或いは博物学博物館（Natural history museum）を想定していたものと思われる^{註5}。

実際にケプロンの建議を読むと、次のように記されている。「一々其物品ヲ買求ムレハ其價量ルヘカラズ、今斯ニ一良策ヲ設ケナハ、些少算スベキ費ヲ以テ其全



写真1 現在の旧函館仮博物場（筆者撮影）

備ヲ得ル事亦難キニアラザル也、其策先ツ交易ノ姿ナリ、已ニ亜墨利加、西洋ニ於テ格物家、稼穡家社ヲ結ビ互ニ音信ヲ通シ候者数百人ナリ、其人々ハ著述書及ヒ各々自國産ノ地質學ニ關係セル鑛石或ハ草木、禽獸、昆虫等ヲ集メ他國産ノ物品ニ交易スルナリ、特ニ日本産出之物品ハ外國ニ於テ最モ冀望スル所ニシテ、皇國固有ノ土木、禽獸、野草ト雖モ亜墨利加、西洋ノ好物家ニ在リテハ其珍重スル品類尤饒シ」^{註6}。

博物院といっても、それについての具体的な言及はなく、もっぱら海外と物品を交換することや、物品収集をはかることについて述べている。物品を購入するには費用がかかるために、交換して集めることを推奨している。アメリカや欧州では、収集家や農業者等は団体を結成して互いに情報をやり取りしている。その人たちは書籍や、自国の鉱物、動植物を集めて他国と交換している。特に日本のものは海外で高く望まれており、日本の土木や動植物などは西洋の好物家にとって珍重されている、ということである。

さらに続けて、ケプロンは物品を海外と交換するための具体的な方策として、次のように布告を出すようにも触れている。「第一宇内ニ布告スル事、物品採集メ方、其貯蓄之法且海外へ轉輸シ博学君子又ハ好物家ニ贈リ方等允可ヲ給フニ之ヲ早速所置スヘシ」^{註7}。まずは、全国に布告することを指示している。物品の採集や保管の方法、海外に輸送して先方の有識者に贈る方法などについて、布告を出す許可をとるように早々に手続きをする。次に、「速ニ英佛獨文ヲ以テ發兌シ世界中格物家、稼穡學家及ヒ博物院へ贈ルベシ、其趣旨ハ交易セン事ヲ企テ贈ル所ノ物品ヲ用意セリ、是ヲ望ム者アラハ其返酬ニ何品ヲ送ル哉報知スヘシト請求スルナリ、足下此事ヲ至善ノ要件ナリト思ヒ給ハ速ニ前ニ言フ所ノ布告書ヲ刊刻スヘシ」^{註8}。続いて、直ちに英仏独文に翻訳した寄贈リストを世界中の収集家、農業学者、博物館に贈ることである。そのために交換する物品を用意し、先方からはその代わりに送ってもらえるものが何かを確認しておくことである。このことが最善の方法だと思えば直ちに布告書を出すことである、という。

ケプロンは北海道開拓のために、どうして博物館が必要だとしたのだろうか。この文面には、北海道に限らず日本全国の物品を海外と交換することが述べられているが、物品を交換することによって集めた物品を北海道開拓のためにどのように活用するのか、その見通しについては触れられていない。先述したように「教導ノ道ヲ開ク」といっても、その具体的な内容は不明であるし、建言書の追伸部分では「日本ニ於テ物産ヲ採集スレハ之ヲ海外へ送り図ニ出シ日本産ノ品類ノ部ニ出シ、之ヲ草行スルハ今貴政府ノ欲スル処ナリ」^{註9}というように、日本の物産を採集して海外に贈り日本産品物を紹介（博物館等に展示される）することは、

日本政府にとっては望むところであろうというのである。

ケプロンが農商務省に在職していた当時、新築した農商務省内に設けられた展示室には、スミソニアン研究所のジョセフ・ヘンリーの勧めにより、腊葉標本が移管されてハーバリウムが作られたり、ペリーの持ち帰った日本産の標本もその中にあったという^{註10}。ペリーが日本から持ち帰ったものは、1860年（万延元）に日本を出航した新見豊前守を正使とする「万延元年遣米使節」一行も、アメリカ政府の特許庁（パテントオフィス）を見学している。そこでは世界中の鳥獣や貝類、海藻類等が陳列されていたことについても触れている。通詞の名村五八郎は、次のように記している。「此内ニハ万国ノ鳥獸鼈介海藻類、其内部ヲ拔出シ、全体ノ儘玻璃中ニ納置アリ、羽毛ノ彩色少モ変セス、又合衆国各部落ニ於テ、先年ヨリ發明ノ武器・鉄砲類、其他蒸氣機関製造ノ諸雛形ヲモ納メアリ、中ニ提督ペルリ日本ヨリ持帰りシ正服并衣類アリ、又暹羅ノ太刀アリ、日本刀ニ同シ…」^{註11}。（パテントオフィス）内部には世界中の鳥獣やスッポン、貝、海藻類がある。内臓を取り出して全体のまま、ガラスケースの中に入れて陳列している。鳥の標本は羽毛の色彩が変色することもない。合衆国各州から発明した武器や鉄砲類、そのほか蒸氣機関製造に関する様々な模型も陳列している。中にはペリー提督が日本から持ち帰った正服や衣類、シャムの太刀もあり日本刀に似ていた、という。スミソニアン博物館にも日本の動植物の標本は所蔵されていたが、まだ断片的なコレクションであったと思われる。

来日したばかりのケプロンはアメリカでは見られない動植物や鉱物等を目にしたことにより、少しでも早くアメリカの収集家や研究者、博物館等の関係機関に届けようと思ったのではないだろうか。ケプロンは、アメリカの農商務省の要職者であったことを考慮すると、日本の自然資料を合法的にアメリカに送ることを考えていたと想定することもできるし、ケプロンが日本の動植物等を組織的に集めることを考えたとするれば、この建言はとても有効な方法であったといえる。世界の自然資料のカタログ化を進めるために、日本の自然資料を短時間で効率的に収集するためにも、この交換という方法はとても合理的な考え方であったといえるのではないだろうか。

開拓使は、このケプロンの建言に対して、特に対応をとることをしなかった。大学校は仮学校として翌年の1872年（明治5）に東京芝増上寺境内に開校したが、博物館については直ぐに実現を見ることはなかった。ケプロンが力説したように、交換によって海外から動植物や鉱物等を集める必要性は必ずしも高いものではなく、この提言は、開拓使ばかりでなく国内情勢からいっても時期尚早であったと思われる^{註12}。

ケプロンが進言したように、海外の博物館と交換して資料を充実させるようになるのは、1877年（明治10）、東京の山下町の博物館（内務省）が、その前年にアメリカのフィラデルフィア博覧会に出品した国内の天産物をアメリカの博物館と交換（外務省が事務折衝）する機会などを待たなければならなかった。この時、「スミソニア」博物館（スミソニアン博物館）とは、同館が所蔵する剥製の北極熊など8件25点（1,400ドル相当）と日本の木材見本、火酒浸漬物、介、木綿、薬草、麻、漆、紙、砂糖の各類や養蚕器械（1,095円余）を交換した。ニューヨーク・セントラルパーク博物館とは同館の剥製獅子、虎、麒麟、カリホルニア熊、鴨嘴獸^{かものはし}など9点（1,700ドル）を木材見本、建築用石見本、鉱石類など（431円余）と交換している。ワシントン勸農寮とは米国木材見本など（237ドル）と日本の漁撈具などと交換し、さらに加傘多大学校とも300ドル相当の剥製動物、海狸、動植物図面などと介虫、動物、腊葉、木材とを交換している^{註13}。

北海道物産縦観所（開拓使仮博物館）の開設

その後、開拓使仮学校が札幌に移転すると開拓使東京出張所内の跡地に、1875年（明治8）8月に北海道物産縦観所が設置された。これについては、ケプロンの博物館についての提言が生かされたという見方がある^{註14}。しかし、ケプロンのいう博物館とは、先述したように、その性格や内容などが不明であることを考慮すると、その提言の延長線上に北海道物産縦観所ができたとい概に言うことは控えたい。

北海道物産縦観所は、縦観所の設置目的を「北海道ノ物産及開拓ノ参考ニ供スヘキ内外ノ物品ヲ展列シ衆庶ニ縦覧セシム」^{註15}とした。その陳列品は、動物（228点）、植物（721点）、鉱物（82点）、製品（459点）の4つに区分され、総数1,490点にのぼる。動物は、鳥獣の剥製や皮革、魚類の標本や加工品（乾物・燻製・魚肥など）などのように、実物や加工品、製品は同じ区分内におかれている。とはいえ、北海道の土地柄を

反映するように、自然資料を陳列したことは一つの特徴といえる。植物は盆栽が大部分で木材見本も多く、製品では輸出製品であった生糸が大部分であり、アイヌの衣類や靴類も含まれていた。

翌1876年（明治9）2月、この北海道物産縦観所は開拓使仮博物館と改称して、陳列面積を拡張して充実化がはかれることになった（写真2・3）。開拓使の黒田長官らが千島で収集したアイヌをはじめ北方民族の収集品などが陳列された。1875年（明治8）10月、日露間で樺太・千島交換条約による千島の譲渡式がシムシュ島・ウルップ島で行われた。この条約は、樺太での日本の権益を放棄する代わりにウルップ島以北の千島18島をロシアが日本に譲渡することなどを取り決めたもので、かつて黒田が政府に対して北海道開拓のためには日露雑居で紛争が頻発していた樺太を放棄することを進言したことが受け入れられて実現したものである。同場の陳列品に加えられた民族資料は、黒田長官や開拓使5等出仕時任為基（理事官）ら一行が、現地で収集した北方民族の生活道具であった。

仮博物館の設置目的は、北海道の産物を広く民衆に公開することである。そのために道内の動植物や鉱物類、其の他有益な物品を収集し、各国の物産も交えて参考にするために東京出張所構内に陳列し、それを仮博物館と呼び、内外人民に縦覧するものとする、としている^{註16}。仮博物館は、北海道物産縦観所を引き継ぐもので規模を拡大して陳列品を増やし、祝日や年末年始を除き毎日を開館日とすることにより一般公開を促進することにした。

仮博物館は同年5月1日から公開されたが、その様子を報じた当時の新聞によれば、「東京芝増上寺開拓使出張所の裏手なる同使の博物館は十圀の喬木が満場に殖繁り林霏あり葡萄あり、種々の奇卉香草を植え付け盆栽の花は四面に紅白の花氈を布き詰めたるが如く真に一個の小公園なり。獣類は大なる駢牛^{かか}一頭、線羊五六頭、熊二匹。其園内に小博覧会の設あり。北海道地方の珍禽奇獣を乾し固め、巧みに其の全体を存する者夥しく、或は各種の獣皮或は焼酎に浸たる種々の獣類あり。或は



写真2 開拓使仮博物館（北海道大学附属図書館蔵）



写真3 開拓使仮博物館（北海道大学附属図書館蔵）

海藻山花或は北海道にて製したる薫の鹿、薫の鮭、蝦夷人の漁獵に用いる三人乗りの皮張り舟、漁獵に用いる草衣、土人の細工物、又札幌本庁に用諸建物より山水の景残らず写真に写し取りて縦覧に供えたれば、其实況真に三百里外を坐上に見る如くなりと東京探報が申越し升たから博雅の士は一度ここに遊覧されてはいかが、縦覧料は一人毎に五厘の由」^{註17}というように紹介されている（写真4）。写真を見ると確かに多くの鉢植えが屋外に陳列されており、中にはサボテンのように北海道産とは思えない植物も見える。仮博物館は、民衆の眼には北海道の物産ばかりでなく珍奇な品物も披露する小規模な「博覧会」と映ったようである。未開の地であった北海道の物産を中心にした物が東京で公開されたわけであるから、民衆から好奇の眼差しが注がれたに違いない。生きた熊が檻に入れられて公開された（写真5）。アイヌ民族の衣類や生活道具も珍しいものであった。翌1877年（明治10）には函館付近で捕獲された海馬（セイウチ）の剥製や、「バルダイカ」と呼ばれる三人乗りの皮張り舟（黒田長官の指導により時任理事官らが千島調査でアリウト族から採集した品物の一部）^{註18}なども人々の注目を集めるには十分であったに違いない。

椎名仙卓は、この開拓使仮博物館を今日の自然史博物館や産業博物館と同じような面をもちながらも、動物園や植物園的な要素もあり、苗木や種子を希望者に払い下げているように農事試験場的な活動も備えていることから、結局は総合的な博物館と見なされるとしながら、一方では「物産陳列場」によく似た施設と評価している。さらに毎日開館することは、当時の「皇国の主館」といわれた内務省の山下門内博物館が一と六のつく日と日曜日だけが開館日であったことと比べれば、「わが国で初めての最も特異な博物館」であったとも指摘している^{註19}。このように性格の定まらない椎名の評価をどのようにみればよいのだろうか。

当時、ウィーン万博から帰国した佐野常民は1875年（明治8）5月、太政官正院に『澳国博覧会報告書』を提出した。そのなかに記された博物館や博覧会についての見解は、殖産興業を進める内務卿大久保利通の考え方を裏打ちするような提言であった。佐野にとっては、博物館と博覧会は勸業を振興するためにほぼ同じ意味で扱われており、佐野は博物館に技術伝習所を付属させて勸業のために技術者を養成する必要性を打ち出した。1875年（明治8）3月、博覧会事務局から内務省に移管された山下町の博物館では、ウィーン万博の出品物や購入品、交換品などが増加するようになり、派遣して伝習させた工人が技術を試業するために施設を構内に設けて、博物館が勸業を振興するように積極的に関わっていくことになった。地方では、金沢博物館や秋田の勸業博物館などのように博覧会のための会場として設置されたところもあり、博物館といっ

てもその多くは博覧会と同じように勸業を目的とする施設であった。

また、大久保利通は近代化のために、佐野常民の説く博覧会の必要性を受け入れて内国勸業博覧会の開催を計画する。1873年（明治6）の征韓論以後、政権の中樞にいた大久保にとっては、勸業をはじめとする内治優先の政策を推し進めることが緊急の課題であった。すると1875年（明治8）8月に設置された開拓使の北海道物産縦観所（開拓使仮博物館）もケプロンがいうところの「教導ノ道ヲ開クニハ文房及ヒ博物院ハ缺クヘカラザル事」としての博物館というよりも、むしろ常設の博覧会のようなものであったといえよう。大久保と黒田は同じ旧薩摩藩の旧知の仲（大久保は黒田の10歳年上）であったことも考慮すれば、黒田が大久保の意向に従ったことは容易に想像できる。北海道物産縦観所（開拓使仮博物館）は、北海道に特化した内国勸業博覧会のプレイベントであったともいえるかもしれない。よって、この北海道物産縦観所（開拓使仮博物館）はケプロンの建言を開拓使が実現したというよりも、中央政府の勸業政策を反映したものであったと思われる。

なお、北海道では1877年（明治10）、札幌仮博物館がやはり開拓使によって設置された。それが設置された詳しい経緯は定かではないが、札幌偕楽園の敷地内の木造平屋建を博物館とした（写真6）。博覧会出品の事務と併せて開拓使札幌本庁物産局博物課が所管したことを考えると、開拓使仮博物館のように勸業を主な目的にする延長線上にあったように思われる。

函館仮博物館の準備

1879年（明治12）5月に開拓使は函館に仮博物館を開設した。関秀志らの研究によれば、函館に仮博物館がつくられた経緯を次のように知ることができる。

調査団一行の代表を務めた時任は、1877年（明治10）1月に函館支庁の権大書記官として開拓行政の責任者に着任した^{註20}。時任は、1878年（明治11）1月

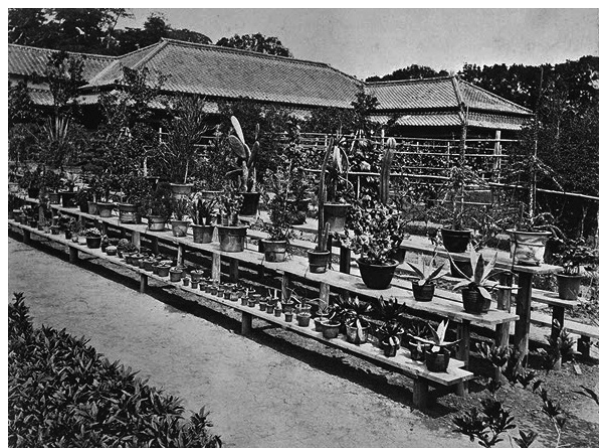


写真4 開拓使仮博物館（北海道大学附属図書館蔵）

11 日付「公園地博物場ノ義二付伺」を函館支庁から開拓使本庁に出し、同年 3 月 19 日付で函館支庁在勤開拓権大書記官時任為基から開拓使長官黒田清隆に宛てに博物場建設のための伺書を提出した。その伺書では、その目的について自然の物産や製造物を収集して一般公開することにより、開拓の進歩を補助するために人民の知識の発達をはかることや、博覧会の出品に備えること、開拓使が製造する製品の見本を陳列して内外人民に対して販売促進をはかること^{註21}などを力説している。博物館設立にはいくつもの理由が付されていることを知ることができる。

なお、函館に着任する前年の 1876 年（明治 9）5 月、時任らは再び北千島諸島や中部千島のコーディアック、アリウト人の現地調査を行い、資料収集ばかりでなく、氏名、年齢、人口、風俗習慣、衣食住、狩猟、宗教などの民族調査をしている^{註22}。条約の締結後に日本の領土となる千島を統治するために、先住民の生活文化の実情を把握するための調査であった。

開拓使函館支庁の責任者となった時任にすれば自らの経験はもとより、後述するように北方調査に参加した者達が身近にいたこともあり、博物館をつくり資料を一般に公開したいという思いがあったことを窺い知ることができる。そのため開拓使函館支庁として、黒田への伺書が受理されると、博物場の充実をはかる措置を次のように講じている。

まずは、資料の収集を一般に呼びかけている。資料収集は建設工事と並行して行われた。開拓使函館支庁は、1877 年（明治 10）5 月に「奇獣珍魚其他怪異ノ動植物ヲ獲ル物ハ之ヲ保存シ後勸業係へ届出」を住民に呼びかけたところ、ヒグマ（軍川村）、マンボウ鯨（函館港内）、野猪（尾白内村）など、各地で捕獲した動物が差し出された^{註23}。さらに、翌年 5 月にも、「鳥獸蟲魚草木土石ノ類尋常見馴レサル形ノモノ」を採集したら、破損しないように手当てをして届け出ることや、寄贈を呼び掛ける広告をしている。同年 4 月には、それまでの寄贈手続きが書類申請であった煩わしさを是正して、寄贈しやすくすることに配慮して申し込む者

は口頭で伝えれば受け付けるようにしたことから、函館や周辺住民から多くの資料寄贈の申し出があった。

次に、同年 8 月、東京大学理学部教授兼東京教育博物館長の矢田部良吉とアメリカ人動物学者で東京大学教師（教授）のエドワード・S・モースが調査のために函館に滞在したところ、開拓使函館支庁は矢田部らを博物場に案内して、博物館準備のために指導を仰いでいる。また、職員の渡辺章三と信澤米一郎の二人を「博物学修業」のためにモースらの調査に同行させている。渡辺は、時任らの千島調査団の一員であった。

その後、函館支庁は矢田部らに対して、博物館準備の協力要請をしている。その依頼内容は次の通りである。第一は、函館地方で採集した動物類の鑑定が済んだ後に各 1 種を寄贈してほしいこと、第二は博物場の「物品陳列ノ位置」「内部ノ体裁」「物品保存ノ方法」等についての指導、第三は陳列箱類を 1 種宛見本のため製作して送ってほしい、ということである。さらに、「陳列ノ箱并台等ノ見本、手摺の高低位置ノ図面、窓幕ノ雛形及幕ノ切地見本、物品名札ノ付方、物品保存ノ方法」で、その他にも参考になるものがあれば見本を送ってほしい旨が書かれている。それに対して、矢田部から協力する旨の回答を得たことから、函館支庁の職員に東京の教育博物館を訪ねさせて、矢田部やモースから指導をうけている。その後、北海道で採集した動植物（貝類、圧葉）標本と標本箱が寄贈されたのをうけて見本とし、函館支庁はそれを地元で調達している^{註24}。

さらに、トーマス・W・ブラキストンにも採集した鳥類の剥製標本の寄贈を依頼して、コレクションの充実を図った。イギリス軍人であったブラキストンは、1863 年（文久 3）に函館を訪れて以来、1883 年（明治 16）まで在留する。その間、製材業や貿易事業をする一方、北海道内を旅行して鳥類の調査研究や、気象観測・測量などの科学技術を函館支庁の官吏の福土成豊に教えた。ブラキストンによる鳥類標本は福土の協力によるところが大きかったことから、福土にも相談して寄贈を快諾している。早速、函館支庁はブラキス



写真 5 開拓使博物館（北海道大学附属図書館蔵）

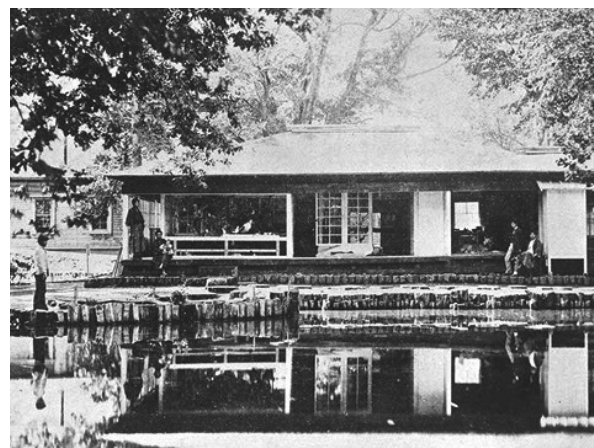


写真 6 札幌市博物館（北海道大学附属図書館蔵）

トンの設計による剥製陳列箱を製作し、1,314羽の鳥類剥製標本を受け入れた^{註25}。実は、福土も渡辺と同じように、時任の千島調査団のメンバーであった。

建物は、1878年（明治11）5月に建設に着手して1879年（明治12）3月に完成したようである。母屋は木造平屋建寄棟造で、床面積32坪8合余である。それに続き、博物場看守人詰所（居所）と便所が増設されたが、母屋とは廊下で接続していた。建設費は1,153円77銭7厘、内装や備品が353円82銭5厘、それに年間運営費（1年分）201円34銭2厘となっている^{註26}。この建物の設計者は不明であるが、函館裁判所なども手がけた新潟出身の田中善蔵が工事を請け負ったもの^{註27}で、日本に現存する最も古い洋風木造の博物館専用の建物である。

函館仮博物場の開場と民衆の反響

こうして函館仮博物場は、1879年（明治12）5月25日に開場式が行われた（写真7）。仮博物場の開設に尽力した時任は、「衆庶ヲシテ更ニ智識ヲ發達シ精神ヲ磨勵シ百般ノ奇器新製ヲ發明セシメ大ニ我ガ北海全道ノ物産ヲ興シ上下均シク無前ノ幸福ヲ亨ント欲スルニ外ナラズ乃チ今此場ヲ開キ山林原野ニ出ス所河海川沢ニ産スル所禽獸魚虫草木花卉ニ論ナク農桑樹芸牧畜耕耘ノ具ヨリ百般ノ物品ヲ包羅陳列シ之ヲ衆庶ニ縦覧セシメ以テ各々感發スル所アラシメント欲ス…」^{註28}と祝辞を述べた。それに続き、官員一同の次に区戸長教員生徒が見学したとされる。当時、学校教育に博物館で実物を見学することの教育的意義が認められていたようで、博物館と学校との連携性を知るうえで興味深い。

その後、順番を待っていた一般来場者が入場したところ、「人民輩は吾先とこそ推し合揉合い股を潜りても先きに出やうとする韓信流もあれば人を突のめしても吾先といふ項羽の如きもあり夫れは夫れは一方ならぬ混雑なれば人に怪我させまじ陳列品に触さずまじと巡査は無論公園世話掛りは必死と成て群集を制すれども



写真7 開場当時の函館仮博物場（函館市中央図書館蔵）

中々制し切ぬ群集なれば斯ては怪我人は愚か圧殺さるる者の出来るも計られねば切手にして混雑を沈めんと夫より急に四五百枚の紙札を製し渡したるにて漸く群集を沈め午後四時に至りて先つ場をば無事に閉られたり」と、その混乱ぶりを地元の『函館新聞』が伝えている^{註29}。

開場から2か月ほど経ち、地元の函館新聞は近在の村々から訪れた老人たちの様子を次のように伝えている。「ハクブツクワン」を仏寺と思ひ違ひ先づ公園に來り水茶屋に腰打掛る前遙か該館を眺めては合掌して南無阿弥陀仏と数度唱へ夫より腰打掛て茶屋の者に賽銭の相場から題目の唱ひやうなど逐一尋ぬる者あるゆえ茶屋では可笑さを堪へイヤイヤ是はお寺ではありませぬ博物館と唱へ凡そ世の中の珍らしき物は何にまれ集めて広く世の人に見せらるる為め御上で建られしものゆえ決して賽銭などの心配は入り申さぬ」^{註30}。老人と腰掛茶屋の者との博物館をめぐるやり取りである。茶屋から見ると、老人たちにとっては仏寺のような威厳や威風が感じられたのだろうか。思わず手を合わせて「南無阿弥陀仏」と拝んでいる。おまけに賽銭の相場まで尋ねている。それに対して茶屋では、博物館と云うもので、珍奇な品物を集めて、それを広く一般に公開するところで、お上が造ったものだから賽銭の心配はいらないといっている。

民衆にとって、この博物館を観る眼差しは、最初は正体不明の建物であり、敢えて類例を探せば函館には高台に教会が建てられていたことから、それを仏寺に言い換えたようである。老人ばかりでなく、茶屋の者たちも博物館を珍奇な物を集めたところと言っているように、好奇の対象の域から出るものではなかった。これまで見たこともない、博物館といわれる白亜の洋館が出現したわけであるから、無理もない話である。

函館仮博物場の陳列品

開場当時の博物場内の様子は、はたしてどのようなものであったのだろうか。開場当時、「函館假博物場陳列物品畧目録」（1879年5月）が刊行されたが、残念ながら現物の存在を確認することができない。しかしながら、「開拓使事業報告書一乾」の「函館博物場」の項によると、禽、獸、蟲、魚、甲蟲、植物、種物類、見本雛形、古器物、北海道土人什器、木類、額面木材嵌入、押葉類、礦物の14類に大別される^{註31}。

筆者が現地に訪れた際に、市立函館博物館の学芸員の奥野氏は、博物場の遠景写真を拡大して見せてくれた。すると、開扉した入口正面に大型の陳列箱が写っている。その写真には陳列箱の上に2体の動物剥製が置かれている。入口から入った正面に天産品を陳列した陳列箱が置かれていたらしい。しかし、奥野氏は、この陳列箱はさらに奥の壁際に置かれていたかもしれ

ないと慎重である^{註32}。謎はしばらくそのままになりそうである。

陳列箱は、今でも市立函館博物館に保管されている陳列箱（木製展示ケース）とほぼ同じ形式のように見える（写真8）^{註33}。もうひとつもほぼ同じサイズで上下2段に分かれている（写真9）。上部は棚板を入れて液浸標本などを並べるのに具合がよい。資料の大きさに応じて、棚板の高さを調節できるようになっている。下部は覗きケースになっている。その下は開き戸の収蔵スペースとなっている。そのほかにも異なる形式の陳列箱が旧函館仮博物館内に保管されている。

観覧料は、当初は「自然其有益ナルヲ知り」というように、公共的な目的や性格に配慮して無料にしたが、予想外に施設の修繕費や列品を交換するために経費がかかるなどの理由により、1年後からは大人5厘（10歳以下の子供は無料）を徴取するようになった。入館者数の推移をみると、開場した1879年（明治12）には41,954人であったが、1880年（明治13）は34,185人（有料27,790人、無料6,395人）、1881年（明治14）は34,776人（有料30,056人、無料4,720人）というように推移している（冬季は休館）。

函館支庁の報告書によれば、「開場ノ初ハ諸人來タ曾テ見ザル珍奇ノ物ヲ觀ルヲ以テ雜沓輻湊スト雖モ事久シケレハ慣レハ之ヲ見ノ事ヲ欲セザルハ世俗ノ通情ナルニ猶ホ年々減セザルハ蓋シ各種ノ物品ニ就キ識ヲ博メ智ヲ磨ント欲ル者多ニ居ルベシ」^{註34}。開場後は物珍しい物を見に来る人達で混雑したが、次第に観覧者数が減るようになったものの、それでも知識を得るために多くの人達がいることが述べられている。

開場後の来場者数が減少したといっても、3万人を超える来場者を維持し続けることができたのは、いったいどういうことだろうか。地元の『函館新聞』は出品物の物珍しさを次のように報じている（アンダーラインは筆者による）。

- ・「公園地内の博物館も明十五日より開場し従前の通り縦覧を許さるよし又た兼て討とりたる野猪も剥製にして陳列さると云ば当道の人には随分珍らしき観物なるべし」^{註35}
- ・「奇鶏 此間室蘭より四足の鶏を持ち来りしものありしが惜しいかな船中にて終ひ死したるが昨日其俣を当勸業係へ差出したるを見るに四足並行し毛色純白にして二三才位の雄鶏にて中々奇なるものの由因て右を剥製となして当博物館へ陳列せらるべしと聞けり」^{註36}
- ・「むささび 茅部郡白尻村官林内字垣の島に於いて異獣一頭を捕獲したりとて同村小川幸一郎より当博物館へ出品したき旨にて去月二十七日差越したるを見し人の物語るに則ち鼯鼠というふものにて顔は

木鼠形は蝙蝠に似たり背部の色は灰褐色にて腹は白し尾は平らにして膜を張り之を張れば七寸に及ぶ此獸たる当博物館に是まで陳列なかりしゆへ一入珍らしとて堀少書記官にも一見あり同官にも古歌には「月はなほ高間の山の梢よりあかつき落るむささびの声（草庵集）などありて其名は聞しが目前見るは始めてなりとて珍重ありしよし因て早速剥製にされしと云」^{註37}

- ・「猩々外二種の陳列 先般英領印度カルコッタ博物館長ドクトル、アンデルソン氏より当県へ寄贈されたる猩々豹外一種の剥製は弥々来る二十三日より公園内博物館に陳列し縦覧せしめらるるよし右猩々は洋名セシヤ、サテラと云ひ熱帯地方即ちボルネオ及びスマタラ諸島の海岸近き溪谷又は山林中に棲息し（中略）豹は洋名フユリス、レオパルドスと称す又外一種はアルクチクテス、ビンハロング（和名無し）といふ動物にて其の体態に似て尾長く且つ力ありて尾の端を樹の枝に巻附けて実を採り食ふといふ何れも珍らしき動物なり」^{註38}。

つまり、民衆は、「随分珍らしき観物」「奇鶏」「見るは始めてなりとて珍重」「珍らしき動物」という言葉に誘われて来場したことが推察される。当時の函館や周辺地でも話題性が広告されたようである。

また、インドの博物館と資料交換したことも話題にもなったようである。「豹熊猿の剥製 昨年秋ごろ印度博物館長ドクトル、アンドルフンシ氏が当地へ来たり当公園内博物館を縦覧の折陳列品の内熊鹿狼の三種の頭骨を見て之を所望されしに付き之を同氏に贈付されしところ今度其の返礼として豹並びに熊の一種猿の一種の剥製及び全体骨各々一個動物書一冊を当県へ贈られし由にて一昨日入港の兵庫丸にて東京より到着したり右は不日当博物館に出陳さるといふ」^{註39}。

このように地元の新聞記事から陳列品が話題になっていた様子を知ることができる。民衆の眼差しが陳列品のもつ「珍奇さ」に向けられていたことを表している。同時期に、教育や勸業の振興を目的にして開館した広島県博物館は1年も経たないうちに、「博物館ハ稍



写真8（左） 写真9（右） 函館仮博物館で使われたといわれる陳列箱

高尚ニ過キ県下人民ノ進度ニ適セズトシ且ツ物産ノ販路ヲ広開スルヲ以テ時勢ニ適ストセシニ依リ同四月博物館ノ名ヲ廢シ之ヲ集産場ト称シ」というように、博物館はやや高尚過ぎたことから物産の販路拡大をはかるために集産場に改められた^{註40}。それに比べて、函館博物場では珍奇とみなされた動物資料は民衆の知的好奇心の対象となったことが知られる。

看守の役割

一方、開拓使は、博物場の入り口に次のような告知を掲示して来場者に注意を呼びかけた（1880年4月）^{註41}。

- 一 本場ハ内外國民一般縦覧ヲ許ス
- 一 風癪乱酔ト見認スル者ハ入場ヲ許サス
- 一 當分之間毎日午前九時ニ開キ午後四時ニ閉ス但大祭日ノミ之ヲ開カス
- 一 場中木履及杖又ハ嵩高ノ物品ヲ携帯シ外喫煙スル事ヲ許サス
- 一 陳列ノ物品ニ手ヲ着ルヘカラス
- 一 掲示ニ違背スルモノハ直ニ退去セシム

場内は内外國民の誰でも縦覧ができる（許可する）。但し、風癪乱酔なる者の入場や音を生じる木履または杖等を携帯すること、喫煙や陳列品に触れることを禁じる。そのような行為をとる者には注意を与え、違反する者がいれば看守により退出させる、というものである。

看守の職務を規定した「五月廿五日開場以来看守処務」によれば、看守が玄関入口に1名と場内の3カ所に1名ずつ配置された（椅子につく）。看守は、注意事項に違反する者がいないことを確認したり、来場者を数えて30名を目安に入れ替えたりした^{註42}。「掲示」から場内は教育の場であったことを窺い知ることができる。教育のためには見ることを阻害する騒音や触れることを排除し静粛に順序よく見て回ることが強要されており、看守の役割はそれを守らせることであったといえる。

開拓使の廃止と第二博物場の新設

開拓使が1882年（明治15）2月に廃止されると、北海道は札幌県、函館県、根室県に分けられた。函館仮博物場は函館県に移管され函館県博物場となった。翌1883年（明治16）には、農商務省北海道事業管理局が出来て北海道全体を管轄することとなり、北海道の行政は三県一局体制となった。しかし、1886年（明治19）1月には三県一局が廃されて北海道庁が置かれたことにより、北海道函館支庁が博物場を引き継いだ。開拓使大書記官であった時任も、函館県令や函館支庁長として地方行政のトップに任じられて、引き続き博

物場を管轄することになるが、同年12月に宮崎県知事に任じられたことにより10年ほど住み慣れた函館を後にした。

開拓使が廃止されることにより、東京の開拓使仮博物場の所蔵品は、函館県博物場をはじめ、札幌仮博物場、札幌農学校、東京の教育博物館に移管された。函館県では、1884年（明治17）8月に最初の博物場に隣接する場所に第二博物場（1963年7月に北海道有形文化財に指定）を建設して、開拓使仮博物場から移したアイヌや北方民族のコレクション（開拓使の収集品）などを陳列した。『函館新聞』は、開場式での内覧会の様子を次のように伝えている。「場内縦覧ありしと建物は表間口七間半に奥行四間半外に玄関四坪にて建築頗る法にかなひ光線の反射もよく陳列品を見るに便なり列品は千島国及び東察加土人の衣類漁具雑具は殊に珍らしく又東京の北海道海産物取扱所の雛形及び風帆船の雛形白峯丸又海馬等は尤も人の注目を促すに足るべく其他凡そ四百品余りありて陳列もよく整頓せり」^{註43}。千島やカムチャッカで採集した民族資料のような珍しいものや、北海道海産物取扱所や帆船の模型、トドのような海獣等400点ほどを整理して陳列した。なお、最初の建物と同じようにこの建物も大きく縦長の窓を設けており、展示品の保存環境を考える現代とは異なり、陳列品に自然光が当たって見やすくなっていると評している。

この開拓使の集めた北方民族の資料は、現在函館市北方民族資料館に保管・展示されている。開拓使の収集品は、現在160点が確認^{註44}されており、アイヌばかりでなく、アリユート、ウイルタ、イテリメン、エベンなどの資料も多い。

野澤俊次郎による所蔵品の再整理

その後、函館博物場技手の野澤俊次郎（1865-1928）が所蔵品を再整理して分類や解説文を作成したことを、野澤が記した『函館博物場第一報告』（北海道大学北方資料データベース）から知ることができる。野澤が再整理した経緯やその正確な年代については不明であるが、1886年（明治19）1月に北海道函館支庁が函館博物場を所管するようになってから資料の補充や再整理が行われたようである。

『野澤俊次郎記念文庫目録 北海道大学水産学部所蔵』（1945年4月刊）によると、野澤は、1865年（慶応元）8月8日旧幕臣野澤房廸の次男として出生し、1885年（明治18）7月札幌農学校を卒業後、1887年（明治20）～1889年（明治22）に東京帝国大学理科大学動物学科に在籍（2年間）し、1889年（明治22）4月に北海道庁技手となった。1892年（明治25）11月に農学校講師嘱託、1896年（明治26）5月に北海道庁技師となり、1906年（明治39）10月に札幌農学校

教授兼北海道庁技師、1907年（明治40）から1909年（明治42）に水産漁撈研究のため独・仏・英・米諸国に留学し、1909年（明治42）に東北帝国大学農科大学水産学科漁撈部主任となっている^{註45}。

函館博物場の所蔵品の再整理を手がけた野澤は、その分類についても見直したところ、それらを天産、歴史、工藝の3部とし、天産は動物、植物、鉱物の3部、歴史は太古、今代の2部、工藝を製造、美術、工業の3部とした。

天産部

動物：芒刺蟲部、蠕蟲部、貝部、有殻蟲部、昆蟲部、
魚部、爬蟲部、禽鳥部、哺乳動物部

植物：乾腊葉、木材、農産（種子・果実・繊維）

鉱物

歴史部

大古（石器、土器）、現代（アイヌの生活用具）
の2部

工藝部

製造、工業、美術

野澤は、所蔵品の分類や陳列品の解説を作成するにあたり、専門書にあたるとともに在留外国人の有識者からも指導を受けた。動物部は、「カール、クラウス」氏の動物書分科法に倣い、芒刺蟲部、蠕蟲部、貝部、有殻蟲部、昆蟲部、魚部、爬蟲部、禽鳥部、哺乳動物部の9部門とした。このうち無脊動物は研究者が少ないために不明のことが多く、僅かに属名を知ることができる程度であることや、貝部についてはモースからの献品により七十余種あるが洋名であるため、まだ和名が不明のものが多く、今のところ四十余種については和名を付けることができたことなどが記されている。

昆蟲部については、^{ひんし}鱗翅類（チョウ、ガ）が最も充実しているのは、函館在留の英人教会教師の「アンドルース」氏の助けと、同氏の紹介で日本鱗翅類専攻家の横浜に在留する「プライアー」氏からも教えを受けた。甲蟲類について「ルイス」氏は日本の甲虫類分科法により名称を付しているが、氏は専門家ではないことから、未だ不明のものが多く。そのほか半翅類、直翅類、二翅類、網翅類等は僅かに属名を知ることができるのみなので、他日、専門家に尋ねることにする。また、有脊動物の魚類、爬蟲類、哺乳動物の名称は東京博物館の目録に従っているが、その解説は「カール、クラウス」氏、「ニコルソン」氏、「パツカード」氏、「カスチール」氏の動物書、「ガンテル」氏の魚類書、魚鑑、本草綱目啓蒙、北海道志等の書を抜粋したが、甚だ不十分であることから後日改正するとしている。

禽鳥類は、英人「ブラツキストン」氏及び福士氏の献品によるもので、日本の禽鳥類の大半を盡しており、今日の日本の博物館ではこの種の収集品では本館の右に出るものはなく実に両氏のおかげであると、その鳥

類コレクションの学術的価値を高く評価している。しかしながら、それまで縦覧後に箱の中に放置されて雑然となっており、整理分類するにあたり適当な禽類書が見当たらなかったが、幸いにも不明種については函館に在留する英人「ベンソン」氏に問い合わせることができた。それでも十余種が不明となっているが、今後の禽鳥類の研究者に助力を与え、有益な研究の材料になることを信じる、としている。

植物部については、乾腊葉、木材、農産に分け、乾腊葉は「グレー」氏分科法による。標本は東京大学教授の矢田部氏の献品にて夏期植物であったので、余が札幌にて採集した春秋両期の植物七十余種を加えて三百二十種となるというように、野澤自身が札幌にて採集した植物標本を補っていることが知られる。

農産物では、（種子については）既に集めた種子の中に虫害を被り縦覧に供することが困難なものがあり、旧七重農工事務所より種子九十余種を買い求めてその不足分を補ったとある^{註46}。果実類は皆酒精漬けでその色が失われるので、他日硫酸石灰にてその形を模造、之を彩色して陳列する必要がある。繊維類は、動植物の二類に分けて動物質繊維の中で生糸は陳列するが、当地の農家は常に無用視している。その屑糸やしび糸等を陳列する必要があることなどについて記している。

つまり、函館博物場の所蔵品は自然資料が充実しており、その学術的な価値が高いものであることが理解できる。また、野澤は再整理にあたり各分野の文献にあたるばかりでなく、見識をもつ在留する外国人に問い合わせることで不明点の解明に取り組んでいる。

また、野澤は解説文を作成しているが、それについても次のように述べている。植物部の解説については、「フーカル」氏、「ベントレー」氏、「ベッセー」氏、「セードン」氏等の植物書、北海道志、日本樹木誌、本草綱目啓蒙等について編成し大略を書いた。農産物は「デカンドル」氏の農産物起原書中より北海道の農産起原を抄訳し、その後穀物分析表を付す。鉱物については、鉱物類は「ダナ」氏の金石書に従い陳列した。其の解説の多くは同書中よりとっている。天産物中鉱物は甚だ不完全であり今後採集が必要である。化石類もまたその数は少なく諸人が注目すべきものは只ノーテラス（方言カボチャイシ）だけで、直径は尺余に及ぶもので、我国では稀と聞くが、その産地は不明である、としている。

歴史部では、古代部は石器、土器等である。石器は神田孝平氏の日本石器要略に従って陳列する、と記している。しかし、この日本石器要略に該当するものはなく、神田孝平は1884年（明治17）『日本太古石器考』（英文）を刊行し、1886年（明治19）に和文刊行していることから、本書のことを指すのではないと思われる。

アイヌの生活用具については歴史部の現代に位置づ

けられている。今（近）代部は、当道土人衣食住の器具を陳列する。陳列品は土人の同化の程度を指示するに充分なりと信じる。今後此部にて要する者は人類学者中、白色人種に属すると云ひ、或は黄色人種に属すると云ひ、或は一種特別人種ではないか。「アイノー」土人に就ての各説を蒐集し置き人類学者の参考に供す、としている。野澤は、アイヌ資料を歴史部に分類するが、その理由は同化の程度を知ることになることや、人種を解明するためには人類学者の研究が欠かせないことを記している。

最後の工藝については、北海道の工藝は甚だ幼稚なれば他道の物品を採集して以て参考に供することがよい、という。工藝部門の収蔵品は自然物に比べて貧弱であったことを窺い知ることができる。

野澤は、これらの陳列を分類整理した目録の順序に従い陳列することを理想としているが、建物の構造や陳列箱（ケース）の都合により、その通りにはいかないものの、動物部（□脚類陳列箱一個、魚類陳列箱一個）、植物部（乾腊葉函一個）、歴史部（陳列箱五個）が必要になると指摘している。その上で、第一博物場（旧開拓使仮博物場）を歴史、天産物の植物、鉱物、工藝部の陳列場とし、第二博物場（北海道庁が設置）を動物陳列場とすること提案している。このように専門家が全ての陳列品を点検、再整理し分類や解説文を作成し陳列を見直したのは、函館仮博物場が開場してから初めてのことであったと思われる。

ところで、野澤がそれに携わったのは果たして何時のことであったのだろうか。先述した野澤の経歴によれば、北海道庁の技手に着任した1889年（明治22）4月以降ということになる。ところが、『函館博物場陳列品目録』（函館市中央図書館所蔵）には、「二十二年度より越高 明治廿三年四月一日現在」というように、この分類目録が既に明治22年度までに完成していたことが知られる。しかも、『函館博物場第一報告』の冒頭部分に野澤が記したところによれば、初めて函館博物場の整理を命じられたのが昨年8月25日、今日それを終えることができ、博物場の陳列品目及び解説と共に、将来の施行する方法の略報を閣下に呈することは光栄である、というように前年の8月25日から整理作業を始めていたことになる。

すると、遅くとも1888年（明治21）8月から野澤は函館博物場で所蔵品の整理作業を始めて翌年に完成させたということになる。そのことを経歴と照らし合わせると、当時は東京帝国大学理科大学動物学科に在学（1887～1889年）していることと食い違う。しかし、1888年（明治21）4月に野澤は、魚類（きうりうお）1件を函館博物場に寄贈していることが『函館博物場陳列品目録』に記されていることから、この時点で野澤が函館博物場と何らかの接点があったことになる。彼の経歴との食い違いについて、どのように理解すれ

ばよいか今のところ不明であるが、野澤の仕事はどうかこの頃ではないかと思われる。

野澤は、『函館博物場第一報告』において、函館博物場の今後の展望についても、次のように述べている。

博物場ナル者ハ開明国ノ都府ニ皆其設ケアラサルナリ。国々ニ由テ、各其ノ目的トスル所各異ナリ。製造国ニ有ツテハ製造物博物場、或ハ其他美術ニ古物ニ動物ニ鉱物又鉱山或ハ植物等諸種雑多ニテナリ。随テ其利益モ亦異ナレリ。然レドモ世界中最モ有名ナル博物場陳列品ニテ廣ク世人ヲ益スル者ハ天産物ニ如クモノナレ。如何トナレバ之ヲ一見スレバ其ノ国ノ気候地質産物等ヲ知り得ケレバナリ。当道ノ如キ未開国ニテハ世人ヲシテ其ノ一般ヲ知ラシメ最モ有益ノモノト信スレバ本場ハ第一北海道天産ヲ蒐集シ、第二参考ニ供スベキ他道ノ製造品等ヲ蒐集スルニ有リテ之ヲ成ス。

博物場（館）は、先進国の都市にあるが、その目的は所によって異なる。工業博物館や美術や古物、自然系の博物館などであるが、当然ながら種類に応じてその目的も異なる。そうではあるが、世界中で最も有名な博物館は自然物を扱う自然系博物館である。これは一目見ればその国の気候や動植物の生息状況などの自然環境を知ることができる。まず北海道民に道内の自然環境を普及することが最も大事なことだと信じる。そのために函館博物場は、第一に道内の自然物を収集し、第二にその製造品などを収集することにする。

この一文から、野澤の博物館観を知ることができる。世界の博物館を俯瞰しながら函館博物場の使命や目的を明確に述べており、それは動植物や鉱物などの自然資料を充実させることに力点を置いた、学術や教育的な博物館の姿を理念としていることがわかる。

そして、野澤はそれを実現するために、次のように方策を示している。

第一に既集の物品を保存する。

第二に前に述べたような欠点を補う（各部門の収集品の不足分を補うことを意味する）。

第三に蒐集品を縦覧に供する。

第四に陳列品中につき有用な研究をなさんとする者を助けてその成果を報告する

第五に既集している物品各種を碩学に依頼して付する。

第六に他博物館と物品交換する。

野澤の博物館についてのこうした方策や考え方を考慮すると、野澤は函館博物場を北海道民に道内の自然環境を普及することを目的にした自然系博物館にすることを目指したといえる。野澤の博物館に対する見識は、開場以来、集めてきたコレクションを母体とし、その不足分を補うために交換などによる収集を行い、コレクションを保管する一方、縦覧することにより公開し、有識者から資料についての専門的な知見を得る

などのように、博物館が有する諸機能を的確に押さえている。

開拓史と函館仮博物場の特徴

函館仮博物場は、草創期の地方博物館の一つであるが、当時の地方博物館が中央政府の傘下でその意向に従っていたのとは異なり、開拓使の博物館としての独自の性格を垣間見ることができる。

○開拓使函館支庁の権大書記官時任為基の果たした役割

まずは、地方行政のトップであった開拓使函館支庁の権大書記官時任為基が果たした役割である。同場は時任為基が開場式の祝辞で述べたように、博物館が「開拓の進歩を補助する」という使命をもっていた。従来、開拓使最高責任者であった黒田清隆に対するケプロンによる博物館設立の進言が北海道物産縦観所（開拓使仮博物場）の設置に活かされたといわれてきたが、それよりも時任らが手がけた函館博物場がそれにあたるのではないと思われる。その理由は次の通りである。

北海道物産縦観所（開拓使仮博物場）は、先述したように内務卿大久保利通が統括する内務省の勸業政策を反映したものと思われるからである。

さらに、開拓使函館支庁の責任者である時任が矢田部やモースへの協力要請に積極的に取り組んだこともあげられる。モースや矢田部に対する協力要請の事務的な手続きは開拓権少書記官の柳田友卿らが行ったが、開拓権大書記官の時任からも職員の佐久間千代美を派遣する依頼文に「博物館ノ體裁、物品陳列取扱方及物産ニ関スル諸般ノ件ハ可成丈同人江御垂示相成候様致度」とし、博物館の様子や陳列品の取り扱い方など博物館の全般的な事柄について教えていただきたいと頼んでいる。同文には＜再伸＞を付して、開拓使が製造した鹿の缶詰 1 ダースを進呈するにあたり、矢田部本人ばかりでなく、モースにも分配するように配慮している。あるいは、モースから寄贈された貝類標本に添えられた目録や名箋に書かれた欧文について「博物一科ノ専門ニ係リ尋常物品と異ナルヲ以テ、當地ニ於テハ翻訳も相成兼右ニ付甚タ乍御手数、御翻訳被下度右目録尙綴相添此段及御依頼候」というように、時任から矢田部に翻訳を依頼している^{註47}。そこからは、時任の博物場を少しでも良いものにしたいという真摯な思いが伝わってくる。ケプロンが述べた図書館と博物館についての「教導ノ道ヲ開ク」とは、時任が開場式の祝辞で述べたように「智識ヲ発達シ精神ヲ磨励シ」と重なる意味合いのように思われる。

時任は、北海道開拓には勸業ばかりでなく、こうして学術教育のほかに内外人との交流、交易などのように外に開かれた視野を持ち備えていた。そのために

北海道を訪れる外国人に見せても恥ずかしくない博物館にしようという思いがあったに違いない。各国領事や海外からの賓客が函館に来れば、函館公園や博物場は名所として案内する場所となっていた。1879 年（明治 12）に来日した香港太守ジョン・ポープ・ヘンネッシー^{註48}や伊太利亜国の皇族ゼノワ殿下^{註49}などの海外の賓客を函館博物場に案内したように、開拓使にとって博物場は社交の場ともなっていたことが窺われる。

○学術教育機関としての地方博物館の萌芽

明治初期の地方博物館は、秋田博物館、新潟博物館、金沢博物館（金沢勸業博物館）、公立名護屋博物館、長野県物産陳列場、京都博物館、大坂博物場（公立大坂博物場）、和歌山集産場、島根勸業博物場、広島県博物館、愛媛県物産陳列場、福岡博物館、長崎博物館、鹿児島県教育博物館などのように、勸業や博覧会、学校教育の普及などの性格をもつが、その多くは政府の殖産興業を地方でも推進するために設置されたものであった。

しかしながら、函館仮博物場には学術教育機関としての地方博物館の萌芽を見ることができる。コレクションは農産物や製造物などのように勸業に関する品物のほかに、動植物などの自然物が多く、アイヌ民族資料も他地方では見られない異色のコレクションであった。そして何よりも、矢田部良吉らの博物館準備の専門的な指導や資料収集に対する協力に負うところが大きかった。

収集には函館や周辺の人々ばかりでなく、調査などで訪れた内外の研究者などから協力を得た。矢田部良吉やモースのほかに、ブラキストンからは鳥類標本が寄贈された。英国の宣教師で民俗学者でもあるジョン・バチラーは、1877 年（明治 10）5 月に来函し、1884 年（明治 17）に再び来函した際に調査収集したアイヌ民族資料（「獺捕器」（土言エレハアクベ）釧路國白糖郡採集）を寄贈した^{註50}。また、モースの後任として東京大学に着任した、アメリカの発生学者のチャールズ・ホイットマンは、1880 年（明治 13）7 月に来函し鳥類や貝類、ヒル類を調査し、採集したヒル数十種を博物場に寄贈した^{註51}。

しかし、1887 年（明治 20）前後になると、全国の地方博物館は商業や産業の育成を目的にする物産陳列場としての性格を強めることになった。函館でもその流れに抗うことはできなかったようである。道庁の函館博物場は 1892 年（明治 25）に北海道庁立函館商業学校附属商品陳列場となる。前年には道庁が水産業の振興を進めたことにより、函館公園内に水産陳列場が新設された。その後、庁立函館商業学校の廃止により、1895 年（明治 28）に旧函館博物場を第一館、第二博物場を第二館とし、函館区役所に移管した。1901 年（明治 34）には水産陳列場が区会で廃館と決議されて、陳

列品は第一館と第二館に移され、1920年（大正9）には第一館を水産館、第二館を先住民族館と改称した。

○野澤俊次郎がめざした函館博物場の将来像

多くの地方博物館が物産陳列場や商品陳列館の性格を有するようになっていく中で、1888年（明治21）頃に野澤俊次郎は、開拓使時代から集められた函館博物場の所蔵品を再整理するにあたり、内外の専門書を渉猟し、在留外国人の有識者に問い合わせ整理分類や解説文の作成、陳列を見直した。

野澤は海外の博物館についての見識をもちあわせており、それらの諸性格と照らし合わせたうえで、函館博物場は北海道民に道内の自然環境を普及することを目的にした自然系博物館とすることを提唱する。それとともに、函館博物場の充実化をはかるための具体的な方策についても触れている。現有のコレクションを母体とし、不足分を補うために交換などによる収集を行い、それを保管、公開し、有識者から資料についての専門的な知見を得るなど、博物館が有する諸機能を確保する必要性について述べている。

博物館学史上から野澤の博物館に対する見識をみると、1887年（明治20）頃は岡倉天心^{註52}や坪井正五郎^{註53}などが欧米博物館の知見をもとに自説を披露した時期である。野澤も欧米の博物館の知識を持っていたことが窺えるが、野澤は動物学の専門家の立場から博物館の機能論を説いたことが注目される。

野澤が東京大学で動物学を学んだ当時の動物学の教授は箕作佳吉（1858-1909）であった。箕作も欧米に留学しており、彼の地における博物館の知見は野澤の博物館観にも影響を与えたと思われる。

また、野澤の分類ではアイヌ民族資料を歴史部に位置づけている。その理由は、陳列品から同化の程度を知ることができるからである。それは明治政府が進めるアイヌ民族を日本国民にする同化政策の影響を受けている。その一方、人種を解明するためには人類学者の研究が欠かせないことにも言及している。

城石梨奈の研究によれば、政府のアイヌ民族に対する見方は、明治初年の段階では対外的に領土や支配といった要素が見え隠れする意図と、対内的には北海道移住促進のための参考品とする意図が矛盾することなく併存していた。しかし、その後の同化政策が進展するにつれ、急激にアイヌ民族の物質文化は変容を遂げていく。明治10年代以降の施設の設置意図や資料のカテゴリーを見ると、勸業資料が重要視されるなかでアイヌ民族資料は「史伝部」というカテゴリーに分類されるようになった。明治20年代半ば頃からは、北海道庁立函館商業学校附属商品陳列場の教育施設の管理に移行する（1884年、札幌仮博物場は札幌農学校の附属になる）ようになると学術研究の対象になると、その推移のあり方を指摘する^{註54}。

野澤がアイヌ民族資料を歴史部に分類したように、この場合の歴史とは日本の歴史（国史）のことであるから、アイヌ民族を歴史のカテゴリーに位置付けることは、日本人への同化政策を色濃く反映している。その一方、野澤が人類学研究とアイヌ民族について触れていることに注目しておきたい。当時、北海道を訪れた外国人によりアイヌ民族については、シーボルト（H. v. Siebold）やショイベ（B. Scheube）などのコーカサス人種説や、トブロトウオスキー（M. Dobrotoworsky）の蒙古人種説などのような見解が出されていた^{註55}。国内研究者でも日本列島に居住した石器時代人について、坪井正五郎のコロポックル説や白井光太郎のアイヌ説が対抗する人種・民族論争が繰り広げられていた^{註56}。野澤は、アイヌ民族を歴史部の中に入れる一方、人類学の観点を持ち合わせてアイヌ民族の人種を解明するためには、人類学者の研究が欠かせないことにも言及している。そこには博物館の眼差しが変化し、アイヌ民族資料を学術研究の対象にもしようとした様子を見ることができる。

註1 岡田一彦 1981「北海道の博物館－函館博物館を中心に」國學院大學博物館學要第6輯、p.1-6

註2 関秀志、中田幹雄、千代肇 1990「明治期における北海道の博物館（1）」北海道開拓記念館調査報告第29号、p.113-139

註3 1875年（明治8）7月に札幌に移転して札幌学校と改称する。翌年に札幌農学校となる。現在の北海道大学の前身である。

註4 開拓使編「教師報文録」第一、北海道大学北方資料データベース、北325 kyo

註5 関秀志 1975「明治初期～中期における北海道の博物館－札幌を中心に－」北海道開拓記念館研究年報第4号、p.49

註6 註4と同じ。

註7 註4と同じ。

註8 註4と同じ。

註9 註4と同じ。

註10 山本哲也 2010「ケプロン、ホーレス」『博物館学人物史 上』雄山閣、p.3

註11 日米修好通商百年記念行事運営会編 1961「亜行日記」『万延元年派米使節史料集成第二巻』風間書房

註12 1871年（明治4）に東京の招魂社で物産会、翌1872年（明治5）に湯島で文部省博覧会が行われるが、常設の博物館は国内ではまだ設置されていなかった。

註13 東京国立博物館 1973『東京国立博物館百年史』第一法規出版、p.156

註14 註5と同じ。p.51

- 註15 大蔵省 1885「開拓使事業報告 第二編」p.479-480
- 註16 註2と同じ。p.115
- 註17 『横浜毎日新聞』1876年(明治9)5月31日付(『新聞集成明治編年史』より)
- 註18 市立函館博物館 1979『函館博物館 100年のあゆみ』p.7-8
- 註19 椎名仙卓 1989『明治博物館事始め』思文閣出版、p.134-140
- 註20 時任為基は黒田清隆と同じ旧薩摩藩出身。1878年(明治11)11月大書記官に任じられ、1882年(明治15)2月に開拓使が廃止され、同月函館県令、1886年(明治19)1月函館札幌根室3県並びに農商務省北海道事業管理局を廃し北海道庁が置かれる。時任は同年同月に北海道理事官となり、同年5月に函館支庁長になるが同年12月函館支庁の廃止により函館を離れて宮崎県知事となる。(函館市中央図書館蔵『時任為基履歴書』より)
- 註21 註2と同じ。p.118
- 註22 註18と同じ。p.7
- 註23 市立函館博物館 2002『はこだて博物史』p.14
- 註24 鶴沼わか 1991『モースの見た北海道』北海道出版企画センター、p.139-143, p.173-184
- 註25 註2と同じ。p.120
- 註26 註2と同じ。p.118-119
- 註27 註23と同じ。p.10
- 註28 『函館新聞』1879年(明治12)5月26日
- 註29 註28と同じ。
- 註30 『函館新聞』1879年(明治12)7月15日
- 註31 註2と同じ。p.124
- 註32 奥野進氏ご教示 2018年8月
- 註33 現在、市立函館博物館に保管されている陳列箱。高さは224センチ、幅61センチ、奥行き94センチのもの。
- 註34 函館支庁「開拓使事業報告原稿」博物場、簿書7、166
- 註35 『函館新聞』1881年(明治14)4月14日
- 註36 『函館新聞』1882年(明治15)1月14日
- 註37 『函館新聞』1884年(明治17)3月1日
- 註38 『函館新聞』1885年(明治18)6月20日
- 註39 『函館新聞』1885年(明治18)4月18日
- 註40 倉橋清方 1991「広島県博物館史」國學院大學博物館學紀要第15輯、p.12-13
- 註41 註18と同じ。p.43
- 註42 註2と同じ。p.122
- 註43 『函館新聞』1884年(明治17)8月12日
- 註44 大矢京右 2015「函館博物館旧蔵資料ラベル考」『平成27年度特別展展示図録 千島樺太交換条約とアイヌ』市立函館博物館、p.38-40
- 註45 『野沢俊次郎記念文庫目録 昭和20年4月 北海道大学水産学部所蔵』1973(中央水産研究所図書資料館蔵)
- 註46 『函館博物場陳列品目録』(函館市中央図書館所蔵)によれば、「旧七重農工事務所ヨリ種子九十余种ヲ購求シテ」に関する資料は1886年(明治19)1月に受け入れている。後述するように、はたして何時頃に野澤が再整理したのかに関わるといえる。野澤が実際に補ったかどうかは定かとはいえないが、北海道庁に移管した時点であることからすると、当時の担当者が行ったと見ることもできる。
- 註47 註24と同じ。p.146-152
- 註48 『函館新聞』1879年(明治12)7月21日
- 註49 『函館新聞』1879年(明治12)11月1日
- 註50 『函館博物場陳列品目録』(函館市中央図書館所蔵)より
- 註51 註23と同じ。p.21-24
- 註52 岡倉天心 1888「博物館について」日出新聞
- 註53 坪井正五郎 1889「パリー通信」東京人類學會雑誌第43号
- 註54 城石梨奈 2011「明治から昭和初期の北海道における博物館とアイヌ民族—その成立経緯と資料集をめぐって—」人間文化創成科学論叢第14巻、p.255-263
- 註55 児玉作左衛門 1970「アイヌの人種所属に関する諸説」『アイヌ民族誌』第一法規出版、p.152-155
- 註56 寺田和夫 1981『日本の人類学』角川書店、p.53-65

謝辞：本稿の調査や執筆にあたり、田城文人氏(北海道大学総合博物館)、奥野進氏(市立函館博物館)、寺内健太郎氏、小町大和氏にお世話いただき、函館市中央図書館、北海道大学附属図書館からは写真を提供していただいたことに感謝申し上げます。